

基礎看護学早期体験学習の効果

－看護学生および体験学習施設からの評価－

The Effect of Early Experiential Learning in Fundamental Nursing: Evaluations by Nursing Students and Facilities Providing Experiential Learning Opportunities

久 川 洋 子¹⁾

Yoko HISAKAWA

吾 妻 知 美²⁾

Tomomi AZUMA

菅 原 邦 子¹⁾

Kuniko SUGAWARA

This study is aimed at evaluating the goal of attaining an early experiential learning in fundamental nursing as a means of broadening the understanding of the nursing care delivery system, so as to identify the effectiveness and problems of such learning. The study was performed on ninety students who agreed to participate, amongst first year nursing undergraduates, who registered in nursing care systems course, and who did experiential learning as part of that training, in eight hospitals (thirteen wards) and eight healthcare facilities. Data on students were collected through questionnaires and records they made after the course completed, and faculty data were gathered by questionnaires. The data were analyzed using simple tabulation and test of mean difference. The free comments were analyzed for content.

The result showed that the level of goal attainment was high according to the students' self-evaluation, and they had a clear understanding of their motivation for nursing as well as of problems they needed to work on. The importance of having experiential learning both at hospitals and other health care facilities was also conferred, since it contributed to a deeper understanding of cooperation with other health care professionals and to understanding a care receiver as an ordinary citizen. The clinical facilities also provided a similar evaluation. Differences however were found in all programs, and understanding among those facilities, therefore, ways and means to narrow such differences need to be devised in the future.

Key words: Fundamental nursing (基礎看護学)

Early experiential learning (早期体験学習)

Evaluation (評価)

1) 天使大学 看護栄養学部 看護学科

(2007年 1 月22日受稿、2007年 4 月26日審査終了受理)

2) 甲南女子大学 看護リハビリテーション学部 看護学科

I. はじめに

少子高齢化に伴う人口構造や疾病構造の変化に伴い、在院日数の短縮や在宅医療の推進など看護を取り巻く医療や社会が変化し、看護職の役割は多様化している。このような状況に対応するため、看護系大学の多くは看護師課程と保健師課程の統合カリキュラムを実施している。宮崎¹⁾はこの意義を「地域社会の変革に向けて組織的に問題解決できるような看護職の育成であり、これは看護職全体の質向上につながる。保健師が看護職であることのアイデンティティの育成」であると指摘する。

このカリキュラムに対応して、看護系大学では、医療施設内と地域における看護を相互に関連させた教育が行われるようになり、病院のみならず、老人保健施設や身体障害者施設などでの早期体験学習が行なわれるようになった^{2)~6)}。学生が入学初期から、看護活動の場を病院のみならず地域にも広く目を向けて捉えることは、看護の役割の多様性を理解するために必要なことである。また、患者のニーズに合った看護を提供するためには、保健・医療・福祉の連携によって可能となる。このことを理解することによって、看護観の広がりや次にすすむ看護の専門科目への動機づけに役立つ

つと考える。

看護基礎教育において、看護のイメージ化や動機づけを強化するために、初期段階での臨地実習が実施され、その効果に関する報告も多い^{7)~10)}。しかし、このような先行研究では、早期病院実習の報告や、施設見学の報告はあるが、学生からの提出物の分析にとどまっているものが多い。

本学では、他職種や施設間、地域などの保健・医療・福祉の連携を体験的に理解し、対象者が社会で生活する存在であることを理解することをねらい、1年次後期に『看護ケア提供システム論』の授業の一環として、医療施設（以下、病院とする）と福祉施設（以下、施設とする）の両方における早期体験学習を実施してきた。

そこで、今回、早期体験学習を行なった学生と、体験学習を受け入れた病院と施設の指導者の双方からの評価を分析し、基礎看護学における看護ケアの提供システムを理解するための早期体験学習の効果および課題について検討することとした。

II. 研究目的

本研究では、基礎看護学における看護ケアの提供システムを理解するための早期体験学習について、学生の自己評価および体験学習施設からの評価より、早期体験学習の有効性と課題について明らか

表 1. 看護ケア提供システム論のねらいと授業展開

ねらい	保健医療福祉システムの場における看護ケア提供の現状と看護者の役割ならびに課題について学習する
	1) 授業時期：1年次後期 1単位 (30時間) 2) 授業展開：1～5回目 講義 <ul style="list-style-type: none"> ・我が国の医療保健福祉に関する制度と介護保険制度の概要について理解できる。 ・保健医療福祉に関する主な施設の設置基準について理解できる。 ・保健医療福祉チームの必要性和チームメンバーの役割について説明できる。 ・看護が提供されている場の特徴と看護の役割について理解できる。 ・看護チームと看護の役割について理解できる。
授業展開	6～8回目 グループワーク【事前】（体験学習を行う2施設について） <ul style="list-style-type: none"> ・体験学習を行う医療施設並びに福祉施設を制度との関連で理解できる。 ・各施設の主なチームメンバーとその役割について確認できる。 ・体験学習時に学習のために確認する内容(疑問、課題、質問事項)を明らかにできる。 体験学習 医療施設(病院)2日、福祉施設(施設)1日 9～11回目 グループワーク【事後】（体験学習を行った1施設について） <ul style="list-style-type: none"> ・体験学習した内容を以下の視点に基づいて整理し発表資料を作成できる。 ・施設の概要とその施設の目的、施設の特徴について ・チームメンバーとそれぞれの役割と連携について ・看護者の役割について ・体験学習で学んだことや看護ケアシステムとしての課題など 12～14回目 各グループのプレゼンテーションと質疑応答 15回目 まとめと課題レポートの説明
体験学習の目標	1) 医療制度や看護ケア提供システムを理解する 2) 看護者の役割機能を理解する 3) 他職種の役割機能を理解し、チームワークの必要性を理解する 4) 病院と地域にある施設の連携の重要性を理解する

にすることを目的とする。

Ⅲ.『看護ケア提供システム論』の授業展開

看護ケア提供システム論は、保健師看護師統合カリキュラムの特徴を活かす科目として1年次後期、1単位30時間の演習科目として大学開設時より開講してきた。授業内容と展開方法は表1に示した。ねらいは、看護が「健康を守る看護と病院の看護」から成り立っていることを早期より学習し、保健医療福祉システムの場合における看護ケア提供の現状と看護者の役割ならびに課題について学習することである。しかし、看護学実習をまだ体験していない学生にとっては、保健医療福祉システムの場合における看護ケア提供の現状と看護者の役割のイメージ化が難しいため、それらを実際に理解できるよう病院と施設の見学を中心とした体験学習を取り入れている。

当該科目は1年次後期開講科目であることから、学生の看護学への動機づけと主体的な学習スキルの習得を意図し、講義、グループ活動、体験学習、プレゼンテーション、文献課題レポートを教授方略として展開している。基礎的な知識の講義後、体験学習を効果的に学習できるように、看護ケア提供システムに関する知識や学びについて整理するワークブックを作成し活用させている。さらに体験学習事前準備と事後整理のグループワークを行い、プレゼンテーションによる体験の共有化を図っている。プレゼンテーションでは、他の科目で習得した技術であるパワーポイントによるプレゼンテーションを、写真1に示したように、各グループで工夫して発表している。



写真1. プレゼンテーション

体験学習は1グループ4～6名で編成し、1人の学生が病院（2日間）と病院以外の施設（1日間）を体験できるように計画している。体験学習施設は、8病院10施設に分かれ、教員が同行しない学生主体の学習としている。なお、施設は、介護老人保健施設、障害者施設、通所リハビリテーション施設、共同作業所などである。各体験学習施設でのプログラムは、看護部長や実習責任者に対して事前にこの学習の主旨を説明した上で、当該施設の特徴を含めて施設側でプログラムを作成・指導することを依頼している。

体験学習後の文献課題レポートは、体験学習に根ざした関心テーマを自分で選択し、そのテーマに関して文献による裏づけを求め、専門的に看護学を学習していくための動機づけとしている。

Ⅳ. 研究方法

1. データ収集方法

対象者はA看護大学1年生90名、体験学習施設の指導者23名（8病院13病棟、10施設）である。調査期間は2005年11月～12月。調査方法は、学生に対しては、学習目標の達成度と、体験学習プログラムの有効性など9項目について5段階の評価尺度を使用した自己評価によるアンケートを実施した。また、ワークブック内の「体験学習で学んだこと」の自由記載欄の記述内容を使用した。一方、体験学習施設の指導者に対しては、体験学習の目標、方法など3項目について5段階の評価尺度を使用したアンケートを実施した。さらに、病院と施設側の指導者から見た「学生が学んでいた内容」と「その他」の自由記載欄を設け、その記述内容を使用した。

2. データ分析方法

データ分析方法は、学生の自己評価は病院と施設に分け、それぞれの項目毎に平均値の差の検定を行なった。ワークブックについては学生の学びが記述された部分を抽出し、意味内容の類似したものをカテゴリー化した。体験学習施設へのアンケートについては単純集計と内容の分析を行なった。分析は研究者3名で討議しながら行い妥当性の確保に留意した。

3. 倫理的配慮

- 1) アンケートは無記名とした。
- 2) 学生には、個人名は公表しないこと、不参加は尊重されかつ不利益にならないこと、結果の公表を行うことについて口頭で説明し、了解を得た。
- 3) 体験学習施設には、施設名は公表しないこと、結果の公表を行うことについて口頭で説明し、了解を得た。

V. 結 果

対象学生は全員女性であった。学生アンケートは回収86名（回収率96%）、有効回答率100%であった。ワークブックは回収90名（回収率100%）、有効回答率100%であった。体験学習施設アンケートの回収は、病院13名（回収率100%）、施設8名（回収率80%）、有効回答率はそれぞれ100%であった。

1. 学生の自己評価

1) 目標達成度の評価

学生の自己評価による細目標の達成度について、9項目の平均点を表2に示した。全体として、最も高い平均点は「看護ケアの提供に看護職と他の専

門職がチームで連携、協働することの重要性の理解」 4.69 ± 0.72 で、最も低い平均点は「医療施設、福祉施設それぞれの設置基準の理解」 4.05 ± 0.87 であった。すべての項目が平均点4点以上の達成状況であった。

病院、施設それぞれの目標達成状況を比較すると、「看護者の多様な役割機能の理解」、「看護職以外の専門職の役割の理解」、「看護ケアの提供に看護職と他の専門職がチームで連携、協働することの重要性の理解」、「チームワークを図る上で他の専門職の役割を理解する必要性の理解」、「各施設で提供された学習プログラムの有効性」、の5項目において、病院のほうが高く有意差（ $p < 0.01$ ）がみられた。

2. 体験学習施設からの評価

体験学習施設からの、体験学習の目的、方法、時間に関する評価結果を表3に示した。

1) 体験学習目的の適切性について

体験学習の目的に関しては、「非常に適切」[かなり適切]の合計（以下、『適切』とする）は病院84.6%、施設50.0%であった。[あまり適切でない][まったく適切でない]の合計（以下、『不適切』とする）は病院、施設とも0%であった。

表2. 体験学習の目標達成度

(学生 n=86)

目 標	細 目 標 項 目	全 体	病 院	施 設	有意確率
1) 医療制度や看護ケア提供システムの理解	看護ケアが法律や制度によって提供されていることへの理解	4.09 ± 0.89	4.20 ± 0.76	3.98 ± 0.99	0.071
	看護ケア提供システムが政策や社会状況により影響を受けることへの理解	4.16 ± 0.90	4.26 ± 0.81	4.06 ± 0.99	0.055
	医療施設、福祉施設それぞれの設置基準の理解	4.05 ± 0.87	4.13 ± 0.78	3.97 ± 0.95	0.090
2) 看護者の役割機能の理解	看護師の多様な役割機能の理解	4.57 ± 0.82	4.83 ± 0.44	4.32 ± 1.03	0.000**
	看護職以外の専門職の役割の理解	4.23 ± 0.84	4.37 ± 0.75	4.08 ± 0.90	0.004**
3) 他職種の理解とチームワークの理解	看護ケアの提供に看護職と他の専門職がチームで連携、協働することの重要性の理解	4.69 ± 0.72	4.85 ± 0.50	4.53 ± 0.86	0.002**
	チームワークを図る上で他の専門職の役割を理解する必要性の理解	4.65 ± 0.71	4.84 ± 0.40	4.45 ± 0.89	0.000**
4) 病院と地域にある施設の連携の重要性の理解	対象者が必要な看護ケアを受けるための病院と地域にある施設の連携の重要性の理解	4.44 ± 0.72	4.49 ± 0.66	4.38 ± 0.77	0.191
	各施設で提供された学習プログラムの有効性	4.47 ± 0.82	4.67 ± 0.58	4.27 ± 0.98	0.000**

** $p < 0.01$

表3. 体験学習施設からの評価

(病院 n=13、施設 n=8)

	非常に適切		かなり適切		大体適切		あまり適切でない		まったく適切でない	
	病 院	施 設	病 院	施 設	病 院	施 設	病 院	施 設	病 院	施 設
体験学習目的の適切性	7人 (53.8%)	1人 (12.5%)	4人 (30.8%)	3人 (37.5%)	2人 (15.4%)	4人 (50.0%)	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)
体験学習方法の適切性	6人 (46.2%)	0人 (0%)	5人 (38.5%)	6人 (75.0%)	1人 (7.7%)	1人 (12.5%)	1人 (12.5%)	1人 (12.5%)	0人 (0%)	0人 (0%)
体験学習時間の適切性	4人 (30.8%)	1人 (12.5%)	9人 (69.2%)	6人 (75.0%)	0人 (0%)	1人 (12.5%)	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)

2) 体験学習方法の適切性について

学習方法に関しては、『適切』は病院84.7%、施設75.0%であった。『不適切』は、病院12.5%、施設12.5%であった。

『不適切』な回答の理由には、「教師がつかず記録物もない分、説明や体験をどう感じたかわかりにくい」(病院)、「体験が見学のみか、参加するかが統一されずグループによりまちまちだった」(施設) などがあつた。

3) 体験学習時間の適切性について

学習時間に関しては、『適切』は病院100%、施設87.5%であった。『不適切』は病院、施設とも0%であった。

4) 学生が学んでいた内容

体験学習施設の指導責任者からの記述では、病院からは「看護職と他職種とのチーム連携の理解」6件、「看護者の役割の理解」4件、「今後の課題の明確化」3件であった。施設からは「対象理解」3件、「コミュニケーションの困難さ」2件、「他職種の理解とチームワークの理解」2件であった。

5) その他

自由記載欄には、学習内容として「目的はよいが、学生が目的を理解せず主体性に欠けていた」(病院)、「看護師の関わりが少ない施設なので自分の役割を意識できずにいた」(施設) などの記述があつた。また、学生の態度として、「言葉遣いや対応がすばらしかった」(病院3件)、「豊かな感性を感じた」(病院) という意見と、「不適切な髪型の学生がいた」(施設) という指摘があつた。

3. 学生自身の学び

科目終了後に提出してもらったワークブックの、「体験学習で学んだこと」の自由記載内容を分析した結果、5カテゴリー、24サブカテゴリーが見出された。その結果を表4に示した。

分類されたカテゴリーは、『システムの理解』、『チーム医療・連携の理解』、『看護の理解』、『自己の課題』、『体験学習の意義』の5つであった。

1) 『システムの理解』

このカテゴリーは医療制度やシステムやその影響に関する内容の記述で、【施設の理解】【医療サービス】【医療の経済性】【入院期間の短縮】

【看護者の人員不足】【健康対策】【事故防止】の7サブカテゴリーに分類された。その具体的内容としては、「施設では企業として病院が成り立っている事に気づかされた」「医療制度の変化によって看護を取り巻く環境が大きく変わる。これからは病院の中だけでなく、地域や社会情勢にも目を向けることが大切」というように、病院が社会システムの中に存在していることの気づきと、広い視野をもつことへの動機づけとなった記述であった。さらに、「医療費を少しでも削減する」、「医療ミスに対してもさまざまな対策があり、なくしていくためには病院全体で努力する」というように、授業では実感できなかった看護の経済性や事故防止をシステム全体で実践していかなければならないことを理解し、看護師としての自分もその一員として活動しなければならないことへの気づきであった。また、「看護師の少なさと忙しさを改めて知った」といった看護の実態の記述も見られた。

2) 『チーム医療・連携の理解』

このカテゴリーは医療チームの連携に関する記述で、【互いの役割を知る】【職種の連携】【チームワークの重要性】【対象者中心の連携】の4サブカテゴリーに分類された。その具体的内容は、「連携の大切さを知った。皆で情報を共有し、協力して患者さんのために動いているのが分かった」、「どの職種の人も患者が少しでも良くなるように努力していた。この気持ちがあるからこそ、チームが団結し協力し合っているのだと感じた」と、患者を中心に、それぞれの職種がその専門性を発揮して連携して協働していることを体験的に実感できていた内容であった。また、「看護師も介護士も見た目ははばかわらない仕事をしていて、看護師は他職種の仕事をきちんと理解しそのうえで看護を行なわなければいけない」というように、介護福祉士との協働を見学し、看護の専門性とは何かを考える記述もみられた。

3) 『看護の理解』

このカテゴリーは看護および看護の対象者－看護者関係に関する記述で、【看護の概念】【看護という職種の特性】【看護者の役割】【看護者としての資質】【対象者の心理】【対象者を把握するための手段】【対象者(家族)と看護者の関係】

表4. 早期体験学習における学生の学び

(学生 n=90)

カテゴリー	サブカテゴリー	具 体 的 内 容
システムの理解	施設の理解	・施設では企業として病院が成り立っている事に気づかされた ・作業所の存在意義を学んだ
	医療サービス	・病院を選ぶということから患者の事を考えたサービス、医療が提供され、情報開示がされていた ・選ばれる施設・病院でなければならない時代で様々なサービスや行事を取り入れていることも学べた
	医療の経済性	・医療費を少しでも削減するために無駄のないようにする ・システムのコンピュータ化ではメリットも多いが、経済的なことや情報管理などの課題も多い
	入院期間の短縮	・入院日数の短縮により退院後のケアや施設の充実が必要 ・在院日数が短くなっていることにより看護師が患者との関わりが浅いことに達成感をもちにくいことを知った
	看護者の人員不足	・看護師の少なさと忙しさを改めて知った ・どの病院でも人手が足りないことを一番の課題に挙げていた。これは患者さんにしっかりしたケアを行なうためだった
	健康対策	・医療制度の変化により看護を取巻く環境が大きく変わる。これからは病院の中だけでなく地域や社会情勢にも目を向けることが大切 ・高齢者がすごく多いということを実感した。そのため高齢者に多い疾患など知らなければならないことが分かった、医療や福祉の領域に高齢者の問題が大きく関わっているということが分かった
	事故防止	・医療ミスに対してもさまざまな対策があり、なくしていくためには病院全体で努力することが必要 ・事故防止のため内服薬、注射、転落には特に細かい注意を払っていた
チーム医療・連携の理解	互いの役割を知る	・お互いの役割を理解することではじめてそれぞれが補い合い、助け合いながら仕事をこなすことが可能になる ・看護師も介護士も見た目はほぼかわらない仕事をしていて。看護師は他職種の仕事を理解した上で看護を行なわなければいけない
	職種の連携	・それぞれの職種がその特性を生かして患者にアプローチすることで、1人の患者をいくつもの視点で捉えることができ情報共有によってより質の高い医療が提供できることを知った ・どの職種の人も患者さんが少しでも良くなるように努力していた。この気持ちがあるからこそチームが協力し合っているのだと感じた
	チームワークの重要性	・医療チームの大切さを理解することができた ・医療チームのコミュニケーションが大切。コミュニケーションが取れて初めて医療ミスが防げたり、安心できる環境を作ることができる
	対象者中心の連携	・連携の大切さを知った。皆で情報を共有し、協力して患者さんのために動いているのが分かった ・病院や施設の連携で共通していることはケアを受ける人の立場になってその人のためになるよう考え行動されていたことだった。常に患者さん、利用者さんを大切に思う気持ちが大変だと学んだ
看護の理解	看護の概念	・その人がいつどんな状態でもその人らしくいられるように手助けをすることが看護師にとって大切な仕事 ・看護とはできない人にちょっと手を貸す、どんな力を貸せばいいのか、何が必要かを考えてケアするものであるということを深く感じた ・いくら医学的に良いと思われることでも患者が嫌がることをするのは看護ではない
	看護という職種の特性	・看護師はなんと忙しいのだろうと思った。患者さんのケアはもちろん事務業も多く全てに決して手を抜くことができない職業と感じた ・看護師が大変な職業であることを改めて実感し、やりがいのある職業だと感じた
	看護者の役割	・看護師の役割とはいったいどういうものなのかを学ぶことができた ・看護師にも様々な仕事があると改めて実感した。その中の共通性は患者さんをよく観察し患者さんにとって良いケアを提供すること ・自分が患者さんを治してあげていると勘違いしてしまいがちだが、治っているのは患者さん自身であり看護師はその人が一番良い状態に保てるようにすることであると学んだ ・働く場によって看護師の役割が違うことを学んだ
	看護者としての資質	・看護師がもつやさしい部分と強い部分を見ることができ、プロとしての誇りや意識を感じた ・看護師には知識、思いやり、忍耐力の他に、判断力、適応性、観察力も求められる。そのほかまだ必要なものはあると思うが「判断力」を備えるのが一番難しいと思った ・看護師にとって大切なものを聞くことができた。知識と技術だけではなく明るい笑顔と声で元気になれるということだった
	対象者の心理	・中途障害の方々への苦しみや悩みを知った ・脳卒中になった人のその後について考えたこともなく、施設の実態が分かりそこに来ている利用者さんの生の声が聞けたことは大きな学びだった
	対象者を把握する手段	・目を見てよく話を聞き、相手を知ることが大切。良いケアを行なうには見るだけでなく言葉の1つ1つを聞く ・自分が思ったことを伝える、どうしたら患者さんの気持ちに近づくことができるのか、患者さんの状態・表情を見て意思を必ず確認する
	対象者(家族)と看護者の関係	・患者さんと家族の両方を援助することで問題を解決することができるということがわかった ・看護師は人間対人間の仕事であると改めて感じた ・看護師がすることは医療行為だけでなく、患者の心の支えになっているということをしごく実感した
	対象者と信頼関係を築くための手段	・看護は患者さんとの信頼関係を基盤に成り立っていることを実感した ・人と人との関わり、相手の立場に立つということから看護が始まる。コミュニケーションを大切に、相手を好きになろうとする気持ちを持たないと相手も受け入れてくれない ・コミュニケーションをとるときに反応がなくても伝わっていると信じて話しかけること、患者の機能から会話を成立させていくことが大切
	自己の課題	知識の習得 ・知識の少なさにとても悔しい思いをしたのでもっと勉強して専門職者として学んで行かなければならない ・学校で勉強していることは臨床で確実に生きてくる、学んだことはどんなことでも全て臨床の場で役に立つということを忘れずにいたい
	技術の習得	・患者さんとのコミュニケーションで患者さんに気を使わせてしまったので次は注意していきたい ・コミュニケーションの難しさを痛感した。相手のことを理解するだけでなく、自分の言ったことが伝わったかわかるということも大切
体験学習の意義	看護者としての態度の習得	・患者さんが安心して話しやすいような笑顔の練習をしていこうと思う ・相手のほとんどは人生の先輩であるからそのことだけは忘れず関わり続ける ・看護師は精神的なケアがとても大切であると感じた。価値を押し付けない。人はそれぞれ異なった人生を歩んで様々な価値を持っているから自分の今もっている価値観で相手を評価するのではなく、相手をありのままに受け入れることがとても大切であると感じた ・目が見えない方、認知症の方など様々なお年寄りがいたが皆に同じように接しきりげなく自分でできない部分をカバーしていることがわかり、利用者の方の尊厳を大切にしていると思った
	これからの学習の動機づけ	・現場で学ぶことがあまりにも多いことに改めて驚いた ・今まで勉強したことのが全てが看護の実践の場で必要だと動機づけができた ・たった3日間の実習だったが、現場で覚えた感動や学んだことを2年生になって発展させることができるようにこれからも勉強したい ・目標をはっきり見え看護師になりたいという意思も固くなった
	授業と臨床の統合	・学校で勉強しているだけでイメージしづらかったことがはっきり見えた ・体験学習で初めて学ぶこともとても多いが、今まで授業で学んできたことを実感として得られたことが大きな収穫 ・大学で学んだことが看護を提供する側としてどんなに大切であるかを再認識させられた

【対象者との信頼関係を築くための手段】の8サブカテゴリーに分類された。その具体的内容は、「その人がいつどんな状態でもその人らしくいられるように手助けをすることが看護師にとって大切な仕事」、「看護師の役割とはいったいどのようなものなのかを学ぶことができた」、「看護師が大変な職業であることを改めて実感し、やりがいのある職業だと感じた」というように、実際の現場で働く看護者の仕事を見たり、その体験を共有することにより、看護学概論などで学んだ知識を自己の学びとして内面化し、看護への動機づけを高めた内容であった。

さらに、「中途障害の方々の苦しみや悩みを知った」、「脳卒中のその後の施設、利用者さんの声を聞いたことは大きな学び」といった、対象者を社会で生活している人とみることができていた記述がみられた。また、「目を見てよく話を聞き、相手をすることが大切。良いケアを行なうには見るだけでなく言葉の1つ1つを聞く」、「看護は患者さんとの信頼関係を基盤に成り立っていることを実感した」、「患者さんと家族の両方を援助することで問題を解決することができるということがわかった」というように、コミュニケーションの重要性、看護者と対象者、家族の関係性を考えていた記述もみられた。

4) 『自己の課題』

このカテゴリーは自己の課題の記述で、【知識の習得】【技術の習得】【看護師としての態度の習得】の3サブカテゴリーに分けられた。その具体的内容は、「知識の少なさにとても悔しい思いをしたのでもっと勉強して専門職者として学んで行かなければならない」、「相手のほとんどは人生の先輩であるからそのことだけは忘れず関わり続ける」と自己の学習不足を自覚し、今後専門的に看護学を学習していく意欲につながる内容であった。

5) 『体験学習の意義』

このカテゴリーは体験学習で学生が感じ、学んだ内容で、【これからの学習の動機づけ】【授業と臨床の統合】の2サブカテゴリーであった。具体的内容としては、「現場で学ぶことがあまりにも多いことに改めて驚いた」、「今まで勉強してきたことの全てが看護の実践の場で必要だという動

機づけができた」、「学校で勉強しているだけでイメージしづらかったことがはっきり見えた」、「目標がはっきり見え看護師になりたいという意味も固くなった」といった肯定的な記述がほとんどであった。

VI. 考 察

1. 看護ケアのシステム理解としての早期体験学習の有効性

昨今の社会の動きや医療を取り巻く状況の変化に伴い、とりわけ人間としての生き方やQOLが問われ始め、健康の概念も変化してきた。このような背景から、看護もまた従来の施設内(病院)から施設外(地域、在宅)も含めた幅広い視野でとらえ直した役割の拡大、自律性が求められるようになった。そして看護者には、その対象者を患者としてではなく生活者としてとらえ、どの健康レベルにあっても、またどのような場にあっても、その状況を適切に判断し、看護を提供するための実践能力が問われている。

看護の初学者が未経験の医療・看護場面や患者を具体的にイメージする方略として、早期体験学習の有効性に対する指摘は多い。しかし、先行研究で報告された体験学習の場は病院で、期間は1日程度の学習が多かった。また、生活者としての対象を理解するための実習報告としては、発達段階毎に保育所、学校、商業施設、老人施設などでの実習報告¹¹⁾、福祉施設で4日間1名の高齢者を受け持つ実習報告¹²⁾などがあったが、病院と施設の両方で実習を行ったものは、大浦ら¹³⁾と、朝日ら¹⁴⁾の報告のみであり、病院と施設の違い、保健・医療・福祉の連携を体験的に見るには至っていない。

本学の早期体験学習における学生の学びの具体的な記述から、「看護の理解」、「これからの学習の動機づけ」が見られ、先行研究^{15) - 18)}と同様、看護のイメージ化や動機づけを強化するものであったといえる。また、学生のアンケートから、保健医療福祉システム論の場における看護ケア提供の現状と看護者の役割ならびに課題について学習することをねらった細目標の自己評価の得点のすべてが4点以上の高得点であったことから、保健・医療・福祉の連携や対象者を生活者としてとらえることを体験的に理解できていると思われた。

なかでも「看護ケアの提供に看護職と他の専門職がチームで連携、協働することの重要性の理解」の得点が最も高かったことから、学生にとって関心が高い内容であったといえる。このことは、学生のワークブックにおける学びの記述のなかで『チーム医療・連携の理解』が多かったこと、体験実習施設のアンケートのなかで「看護職と他職種とのチーム連携の理解」が最も多かったことから裏付けられる。

本学の体験学習では病院と施設における、看護の役割、さまざまな専門職種との連携の実際から、「看護の専門性」とは何かを考える契機となっていた。さらに、地域で生活する病人や障害者と触れ合うことによって、看護が生活を見るものであり、個だけではなく家族や地域といった単位で見ていく必要性を認識することができていた。看護の役割や活躍する場が多様化している現在、看護師保健師統合カリキュラムの利点を生かすためにも、早期からチーム医療の連携や地域に住む人とのかわりを体験学習することは、より広い視点で看護の役割機能をとらえ、今後の学習への動機づけを高めることを可能にすると考える。

本授業は、講義、グループワーク、体験学習、体験共有のための発表会からなる。体験学習では講義やグループワークで疑問に思ったことを、各自がひとつ以上質問するように促している。また、学習プロセス全体を通して、文献検索、討議法、レポート記述のスキル、パワーポイントなど教育機器を用いたプレゼンテーションのスキルなど、他の科目で修得したさまざまな学習方略を活用することを意図している。このような学習スキルの活用により、知識が統合され発展していく。また主体的な学習の態度の育成につながっていくと考える。看護基礎教育において、必要な知識、技術の習得は勿論であるが、自律して自己学習していく能力の育成のためには、学生の潜在能力を引き出すような体験を早期から実施することが重要であると思われる。

2. 看護ケア提供システム論の授業の課題

学生のアンケートから、自己評価の平均得点が低い項目は、「医療施設、医療福祉施設それぞれの設置基準の理解」および「看護ケアが法律や制度によって提供されていることの理解」であった。「設置基準」については学生の関心および必要性

の理解が低い可能性があることが示唆された。対象者に適切な看護ケアを提供するためにどのような施設があり、そこで対象者が専門的なケアを受けることが、健康の保持、増進、回復にいかに関与するかの概略をさらに理解できるように授業を展開し、それを体験学習で確認することができるようにする必要がある。

また、「医療制度や看護ケア提供システムの理解」は体験学習において見えにくい目標であることがわかった。看護ケアが法律や制度によって提供されていることの理解については、授業によって知識としては理解可能であろう。しかし、それが、社会の中で生活している対象者に対してどのように影響し、活用されているかは、事例などを通して実際の全体像を描くことができなければイメージ化することは難しいと思われる。したがって、これについては、授業のなかで、実質的なイメージがつくような事例を用いたり、体験学習でも実際に、医療制度と看護システムの実態を具体的な事例を通して確認できるように強化することが必要となろう。

しかしいずれの目標についても、学生の自己評価の得点は4割以上と高かった。このことに影響した要因として以下の3点が挙げられる。第一に、病院、施設の両方で体験学習を行ったことが挙げられる。学生は、「病院や施設の連携で共通していることはケアを受ける人の立場になってその人のためになるよう考え行動されていたことだった。常に患者さん、利用者さんを大切に思う気持ちが大切だと学んだ」、「大学で学んだことが看護を提供する側としてどんなに大切であるかを再認識させられた」と、授業の内容がそのまま臨床現場で生かされるという体験をし、病院と施設の両方を体験することによって、どこにおいても看護の基本的な役割や連携が重要であること、それが対象者のために行われていることを実感し、授業と体験との統合を行うことができていた。

病院と施設の自己評価の平均得点を比較してみると、病院のほうが有意に高い項目がいくつかみられた。この理由としては、施設は1日、病院は2日という体験学習期間の違いによるためと、病院の方が看護師、および他の専門職が多く、その役割や連携が明確でわかりやすかったためであると考えられる。しかし、「脳卒中になった人のその後について考えたこともなく、施設の実態が分かりそ

ここに来ている利用者さんの生の声が聞けたことは大きな学びだった」と、対象者の健康状態の変化やその後の生活など施設でなければ学ぶことのできない内容を学んでおり、そこから連携の必要性を学ぶことにつながっていくことができていた。今後も病院と施設の両方の学習体験が必要であると考ええる。

なお、体験学習施設からは、体験学習の目的が適切であると評価した施設は50%と低かった。病院からの評価84.6%と比べると低い結果であった。施設からの自由記載欄に「看護師の関わりが少ない施設なので自分の役割を意識できずにいた」とあるように、施設では看護師が少なく看護の役割を学ぶのが難しい、また体験学習の目的や趣旨が十分理解されていない可能性もあると考える。基礎看護学実習を受け入れる機会の少ない施設に対しては、学生の状況と大学側の目標を理解してもらえよう、今後も調整を続けていく必要がある。

第二に、体験学習前の課題を明確にして体験学習に望んだことである。学生は事前学習を行い、その上で自己の疑問や、現場で確認したいことなどを課題として明確にして実習に臨んでいる。学生は、「体験学習で初めて学ぶこともとても多いが、今まで授業で学んできたことを実感として得られたことが大きな収穫」と、課題をもって現場に臨んだことで学習内容が深化したり、内面化する体験をしていた。課題の明確化により、学習の動機付けが高まり、積極的に学ぶ姿勢につながり、結果として学生の自己評価の高さにつながったと考えられる。

体験学習のプログラムは、授業担当者が体験学習の目的、目標、日程を説明したのち、スケジュールについて各病院、施設は独自に計画し実施している。さらに、実習中の指導は大学側の教員が現場に同行するのではなく、体験学習施設の指導者に委ねている。この指導方法は、学生が主体的に行動せざるを得ない状況を作って主体性を引き出すことを狙っている。この学習方法のため、「目的はよいが、学生が目的を理解せず主体性に欠けていた」、「体験が見学のみか、参加するかが統一されずグループによりまちまちだった」といった学生の問題、「看護師の関わりが少ない施設なので自分の役割を意識できずにいた」、「教師がつかず記録物もない分、説明や体験をどう感じたかわかりにくい」などの指摘もみられた。しかし、体

験学習の目標、方法の理解を図り、記録や施設へのフィードバックを充実させることで、この問題は解決することが可能である。この体験学習は、臨床側にとっては、教員が同行する実習よりも負担を強いられるので、施設の理解と協力は実施することはできない。授業の趣旨を理解している病院と施設のプログラムに支えられていることから、今後も病院、施設との連携を密に保ちながら、学習記録や、評価方法をより具体的にすることが必要である。

第三に体験学習後の体験の共有化による意味づけが挙げられる。体験学習で自分が見聞きし理解した内容をグループで話し合い共有化し、深めた内容を発表し、さらに全体で討議する。この学習プロセスを通して、自分たちが体験したことが、対象者にとってはどのような意味があることであったのか、学習者としての自分にとってはどのような意義があったのかを深く実感することができる。このような学習から、学生は達成感を持つことができたと考えられる。先に述べたように、施設間のプログラムによる学びの違いも見られる。しかし、学生の自己評価ではばらつきがみられなかったことから、実習後のグループワークと発表において解消可能であると思われた。

本授業においてはこの発表会が学生の学びの深化に反映する。したがって、今後は、初学者に対する、発表や質疑応答の能力をさらに身につけるための、オリエンテーションやグループワークでの指導の方法を検討していく必要がある。

VII. 結 論

本研究は、基礎看護学における看護ケアの提供システムを理解する早期体験学習について、学生の自己評価および実習施設からの評価より、早期体験学習の有効性および課題について検討することを目的として行った。

その結果、学生の自己評価による目標達成度は高く、看護に対する動機づけや自己の課題を明確にしていた。また、職種の連携や生活者としての対象理解にもつながっていたことから、病院と施設の両方の体験学習の重要性が示唆された。また、体験学習施設からも同様の評価であった。しかし、施設間のプログラム格差や理解度による違いも見られたことから、施設間格差を少なくする工夫が

今後の課題である。

最後になりましたが、研究にあたり体験学習施設としてご協力いただいた病院、施設の皆様、学生の皆様に感謝します。

引用文献

- 1) 宮崎美砂子：保健師教育を4年制大学（統合カリキュラム）で行うことの良さと課題，公衆衛生看護における人材育成の向上をめざして一改めて保健師の大学教育と卒後の教育を問う，公衆衛生看護のあり方に関する検討委員会報告書，40，2004.
- 2) 小林美奈子他：生活者として対象理解を目指した基礎看護学実習の学びの分析，第35回日本看護学会論文集（看護教育），66 - 68，2004.
- 3) 守屋治代他：保育園・幼稚園における基礎看護学実習の教育的意義の検討（第一報），東京女子医科大学看護学部紀要，6，53 - 61，2003.
- 4) 北原悦子：早期体験学習の試み 看護学生の看護・介護等体験の試み，九州大学医療短期大学部紀要，139-142，2001.
- 5) 林有学他：施設見学実習における学友の効果に関する研究，第32回日本看護学会論文集（看護教育），9 - 11，2001.
- 6) 河原宣子他：生活者重視の看護実践能力を育む教育方法－「ふれあい看護実習」を通して－，第30回日本看護学会論文集（看護教育），41 - 43，1999.
- 7) 柿原加代子他：基礎看護学実習（見学実習）におけるレポート記述内容の質的分析－環境の援助技術の記述内容の分析から－，日本赤十字愛知短期大学紀要，第15号，1－13，2004.
- 8) 佐藤まゆみ他：基礎看護学実習Ⅰ－Ⅰの教育的効果と今後の課題－実習後のレポート内容を分析して，第35回日本看護学会論文集（看護教育），63 - 65，2004.
- 9) 小野晴子他：基礎看護学一日実習の効果と位置づけの検討－実習記録の内容分析を通して（PartⅡ）－，新見公立短期大学紀要，第22号，53－63，2001.
- 10) 石井くみ子：見学実習の対象・看護の学びの検討－実習記録の分析から－，第31回日本看護学会論文集（看護教育），12 - 14，2000.
- 11) 小林美奈子他：生活者として対象理解を目指した基礎看護学実習の学びの分析，第35回日本看護学会論文集（看護教育），66 - 68，2004.
- 12) 浜端賢次他：社会福祉施設を活用した基礎看護学実習Ⅰの学び，川崎医療福祉学会誌，14（2），429 - 436，2005.
- 13) 大浦まり子他：基礎看護学実習Ⅰ－①レポートの内容分析，香川県立医療短期大学紀要第1巻，61 - 69，1999.
- 14) 朝日雅也，大塚真理子：埼玉県立大学におけるインタープロフェッショナル教育とカリキュラム改革，Quality Nursing，10(11)，13 - 21，2004.
- 15) 前掲書 7)
- 16) 前掲書 8)
- 17) 前掲書 9)
- 18) 前掲書10)